

ヨーロッパの都市・日本の都市

* 文中敬称を省略します。

* トイレでお読みください。

都市研究センター 研究理事
渡辺 直行

はじめに

ヨーロッパの都市は美しい。日本の都市は美しくない。日本はヨーロッパの都市づくりに学んで美しい都市をつくらなければならない。これは本当だろうか。ヨーロッパの都市づくりに学ぶと日本の都市は美しくなくなる、ということはないだろうか。

1. あの空に光るモノ あれは・・・

日本の都市づくりの課題は、アサヒスーパードライホールが表象している。あの空に光る金色のフィリップ・スタルクの「火の玉」は「筋斗雲」(きんとうん、孫悟空が乗る雲)のようでもあるが、実のところあれは建築三酔人によれば「うんこ」であり(『東京現代建築ほめ殺し』洋泉社、1997年)、吉本隆明によっても「ウンコ」である。かなり哲学的な「ウンコ」である。それに関する吉本の説明は以下のごとくである。

つくった人の理念では、これは一種のシュールリアリズム的異化作用によって無意識の何かに訴えたかったのだそうです。(中略)まあ、何を言おうとしているのか、私にはよく分かりません。

ともかくこれを見てまず感じるのは、何だ、ばかにするな、ということです。(中略)私なりの解釈をすれば、第一次産業を第三次産業の頭

の上に乗せようとしたのです(笑)。(中略)

ウンコは地面にあれば避けて通ればいいのですが、頭上にあるのですから、ついつい仰ぎ見てしまい、(中略)これは、ある程度エコロジストの考え方と似ています(笑)。(中略)社会の行き着くところは何かということ、エコロジストと同じイメージで表現したということでしょう。(中略)それは、先進社会の都市を破壊せずにプロテクトする、唯一のやりかただったと思います。

(吉本隆明「像としての都市」

NHK都市総合研究所編

『感性都市への予感』ぎょうせい、1992年)

「第一次産業を第三次産業の頭の上に」乗せるとは、どのようなことを意味するのだろうか。それは、日本の都市を美しくすることと関わりがあるのであるだろうか。それらを考える上で、木村尚三郎の次の指摘が大変参考になる。

いわゆる「失われた10年」のあいだに、食と芸術、スポーツとボランティア活動は、まさに世界レベルに達しつつある。日本から海外へのお土産には、クッキーを持っていけば間違いなく喜ばれる。じつにおいしく、舌ざわりがいいのである。菓子王国ニッポンが、確実に浮上しつつある。

訪日中国人の数はこの10年間に、20万人(1994年)から45万人(2003年)へと、2倍以上の伸びを示している。彼らが一様に感心し、称賛するのが、日本のおいしさ、食材の「新鮮さ」であるといわれる。野菜であれ、魚・肉であれ、とびきり新鮮で衛生的だと驚きの声をあげる。この点でも、今や世界の最高水準にあると比べてよく、世界に向かって大いにPRする必要がある。(中略)

日本の農産物の美しさ、おいしさ、種類の豊富さも、少しずつ世界の人気となり始めている。(中略)生活文化のレベルの高さが、何にも増してその国の文化力を表現する。

(木村尚三郎「食の王国ニッポン」

週刊東洋経済2004年10月9日号)

江戸時代までの日本の都市は、その美しさが外国人から称賛された。その美しさの背景には都市内及び都市周辺の第一次産業が少なからず貢献していた。今や日本の都市は「おいしさ、食材の「新鮮さ」」だけが称賛されている。それが都市の美しさと切り離されてしまった。日本で都市の美しさを回復する肝心要の点はここにある。すなわち、食のサービスを支える農業を都市と結びつけること、「第一次産業を第三次産業の頭の上に乗せよう」とすることである。

2. 紙の怒りと悲しみ

「第一次産業の復活」をより広く「自然環境の復活」とまで読み込めば、結局、21世紀の日本の都市の根本課題は、これである。「ウンコ」を前にしたときの紙の怒りと悲しみ。ここにこそ都市問題の哲学があり、これをぬきに都市再生は語れない。次のような話もある。

西岡秀雄(慶應義塾大学名誉教授) 紙そのものを使うのがはたして文化か、という問題にぶつかってきたわけです。また、今の調子で紙を使っているとどえらいことになるでしょうね。

平田純一(東陶機器常務) つまり森林資源がなくなるということですね。

西岡 そうです。現在、日本人が一日に使っている紙の量は、平均でトイレトーパー13メートルなんです。そうすると、国民全体では地球を10周り超えますよ。それを一日に使うんだからね。今、幸いなことに、紙で始末している人が3分の1以下だから、いいんです。だけど、あとの3分の2以上の地球の人が、紙でお尻をふくのが文化だなんて思って、みんなが紙を使い出したらえらいことになるから、今のうちに切り替えないとだめなんじゃないか。(中略)

平田 意識のない人では、そんな紙ぐらいのことはということでしょうが、1億2000万の人口で掛け算すると、社会問題というか、資源問題までくるのではないのでしょうか。

(西岡秀雄『トイレトーパーの文化誌』

論創社、1987年)

これからの都市研究には「人糞地理学」も加えなければならない。トイレで使った紙は再生できるからよいではないか、と思う人はいないであろうが、トイレトーパーを再生紙にすればあとは水に流れてしまうからよいではないか、と思う人のために以下の話も付け加えておきたい。

新聞や雑誌は回収され、再び紙となって生まれかわることができる。ところが、トイレトーパーにはその再生がない。お尻をふいてし

まえば、もう紙としての使命はそれで終わり。水とともに流されてしまい、回収のしようもない。

でも、消えてなくなってしまうわけではない。水に溶けて分解しているとはいえ、下水処理場での処理過程では、汚泥にまじってひきあげられ、乾かしてから燃されている。手間ヒマかけて、だれかがどこかで処理しているのである。

“私出す人、あなた処理する人”の状態なのである。

(鶴都留とおトイレ研究班『自然はめぐる』

五月書房、1990年)

もちろんこれは紙だけの問題ではない。例えば、目下ヒートアイランドが最大の都市問題のひとつになっているが、高層ビルや自動車などが熱をどんどん出す一方、浴衣姿の女性その他が「大江戸打ち水大作戦」なるものを汗を掻きながらまことに細々と行っている。これなどはまさに「私出す人、あなたまく人」である。

最後に、トイレに関するさまざまな試みが山本耕平『まちづくりにはトイレが大事』(北斗出版、1996年)に紹介されているので、一部引用しておきたい。

私は最近ある自治体の廃棄物処理施設の建て替え計画の策定に関わったが、その時最新の尿尿処理技術では飲み水にできるくらいまで処理できるという話を聞いて驚いた。尿尿は成分がはっきりしており、施設の規模も小さいために、かなり高度な処理ができる。汲み取りトイレでも尿尿を処理した排水は河川や海に放流されるのだから下水道と同じではないかと思われるかもしれないが、窒素やリンの除去という点では尿尿処理施設に軍配が上がる。

また、尿尿のうち「尿」は肥料になったり、薬品の原料になったり、いろいろな用途がある。下肥には寄生虫が伝染する可能性があるが、尿だけであればそのような問題はない。(中略)環境保全と尿尿の有効活用という点では、汲み取りトイレの見直しが望まれるところである。

尿尿を処理するシステムには、汲み取りトイレや水洗トイレ以外に、焼却、乾燥、堆肥化等の処理もある。ストックホルムでは、市民は郊外にサマーハウスという別荘を持っており、そこで農業を楽しんだりする。そこで使われているトイレは堆肥化するコンポスト・トイレである。残念ながら、サマーハウスのトイレを見たことがないのでどういうものかはわからないが、技術的には日本でも開発されている。しかしまだ利用されている例は少ない。

3. 都市の美しさをつくるもの

上では「ウンコ」と記してきたが、この言葉は実は「ウン」という擬声語に「コ」という接尾語が付いた幼児語であるらしい。そのような言葉を研究で用いるのは不適切であるとの「ウンコ」に理解のない声も聞こえてきそうなので、改めて他の言葉を探してみたが、距離感が近すぎたり遠すぎたりで、あまり適切なものがない。「ウンコ」が程よい距離感なのである。吉本隆明が「ウンコ」と言うのも、それが哲学的思考を促す言葉であるからに違いなく、つまりは学術用語である。そこで、以下では学術用語としての「ウンコ」を用いる(ただしカッコ付き)。

都市の美しさは「ウンコ」のあり様と深く結び付いている。「ウンコ」が循環する都市は自然が美しく人工は簡素である。「ウンコ」が循環しない都市は自然が貧弱で人工は華

美である。

ヨーロッパの都市は、かつて「ウンコ」の都市であった。人々は青空の下で日中堂々と事をなし、街路や広場には高々と積まれていた。雨の日などはそれらが泥流となって道の真ん中を流れていた。その泥流には窓辺の花越しか否かのバケツから落下する滝が合流し、そのうち雨の日でも流れなくなった。

さすがに見るに見かねた役所は、家屋の中にトイレをつくれとのお達しを出したり(1374年のパリ)、青空便所を禁止しようとした(17世紀のトロア)。パリなどは1533年にも高等法院が「各家に恒常的な糞尿溜めを設けること」を命じ、さらに1539年には「パリ市を清潔かつ美しく維持するための規則と法令」により建築に糞尿溜めを備えることを義務付けた。他の都市でも同様の措置がとられたが、市民はふんまんやる方なかったらしく、街に不穏な空気が流れた。トロアの場合など代表団が市庁舎に抗議におしよせ、「我等の父祖彼の地に糞を垂れたり。我等ならびに我等の子孫また彼の地に糞を垂れん」と声を張り上げたため、役所も従前どおり市民の便宜を図らざるを得なくなった(ロジェ=アンリ・ゲラン著、大矢タカヤス訳『トイレの文化史』筑摩書房、1987年)。

女性のハイヒールはそのような都市における必需品として生まれ、以前は爪先の方も高くなっていたという。香水が発達し服装が華美になったのも、そのような街の不快事情と関係があったらしい。街並みが華美になり、また、窓辺の花が出るようになったのも根底に同様の理由があったとするならば、ヨーロッパの都市の美しさは「ウンコ」がつくったと言えるかもしれないが、この点は今後の研究課題である。

以上のような事情は庶民の住むところばかりではなかった。例えば、ヴェルサイユ宮殿が建設されたのはルーブル宮殿が「ウンコ」で満ちてしまったから、という話はよく知られている。そのヴェルサイユ宮殿もまもなく埋まり、18世紀には回廊などにもあふれてしまった。そのような中、毎晩のように舞踏会が催され、参加者は携帯用便器を持参したが、その中味は帰りには宮殿内に捨てられていった(プランニングOM『トイレは笑う』TOTO出版、1990年)。

このようなヨーロッパではあるが、それ以前には清潔な発想の時代もあったようである。海野弘他『ヨーロッパ・トイレ博物誌』(INAX、1990年)には、水洗トイレを発明した詩人ハリントン(16世紀末)の本について、次のような紹介がある。

ハリントンの本には面白い絵が入っている。ある神父さんがハリントンのつくったトイレに坐っている。彼は用を足しながら、ふとお祈りの文句を唱えたところ悪魔が出てきてしまった。そして、トイレのような不浄なところで神の名を口にすると、神を汚すものだと彼を威嚇した。そこで神父さんは次のようにいった。

私の祈りは神へのものであり、お前にはウンコをやろう。

清い祈りは、天に坐す神のもとにのぼってゆき、ウンコは、それにふさわしい地獄の悪魔のところに落ちてゆく。

ハリントンは水洗トイレによって、清潔と不潔をはっきり区分したが、そのことによって、天国と地獄、神と悪魔をも上下に区分したわけである。

このような発想は、日本の弥生的発想とよ

く似ている。しかし、後述するように、日本はヨーロッパと異なり「ウンコ」に魔力があった。つまり、人々の間に自然に対する畏敬の念があった。また日本ではたぶん縄文的な循環の思想が健在だったことにより都市の清潔が保たれたのに対し、ヨーロッパでは都市の人口膨張の下でも循環の思想を欠いたために上記のようなことになった、のではないかと思われる。

ヨーロッパでは馬糞は畑に用いられたが、人間のものは用いられなかった(もっともローマ時代のローマでは農民が畑まで運んだともいう)。日本はその逆であった。都市とは馬が集まるのではなく人間が集まる場所であるから、日本の思想の方が都市にとっては好都合であった。それが日本とヨーロッパとの都市の風景の違いをつくった。

西洋人は日本の都市の自然の美しさ后感嘆したと言うが、それは「ウンコ」の循環する美しさ后感嘆したということでもある。日本人は西洋都市の人工の美しさ后感嘆したと言うが、それが仮に虚飾と呼べるものだとするならば、それは前回引用したコールハースの「虚仮威し」という言葉を連想させもする。

4. 日本の都市の再発見

ヨーロッパの都市は、勉学を蓄積した結果、今では虚飾ではない美しさを獲得しているようにも思われる。ドイツなどには日本がおおいに学ぶべき環境都市も多い。しかしドイツの環境都市は東洋の思想に学んだとも言うから、日本人がそれをドイツ経由でしか評価できないのだとすれば悲しい。東洋の知恵をドイツ経由で発見するという事態は、次の話を思い起こさせる。

ぼくは、王子さまのふるさとの星は、小惑星、B-612番だと思っているのですが、そう思うのには、ちゃんとしたわけがあります。その星は、1909年に、トルコのある天文学者が、望遠鏡で、一度見たきりの星なのです。

そこで、その天文学者は、万国天文学会議で、じぶんが発見した星について、堂々と証明しました。

ところが、着てる服が服だというので、だれもその天文学者のいうことをほんとにしませんでした。おとなというものは、そんなものです。

さいわい、B-612番の星の評判を傷つけまいというので、トルコのある王さまが、ヨーロッパ風の服を着ないと死刑にするとのおふれをくだしました。そこで、その天文学者は、1920年に、たいそうりっぱな服を着て、証明しなおしました。すると、こんどは、みんなが天文学者のいうことをうけいれました。

(サン=テグジュペリ『星の王子さま』)

内藤濯訳、岩波書店、1953年)

筆者自身も以前「ドイツに学ぶ都市再生政策」(2001年)なる小さなレポートをつくったが、その少し後に書店で目に飛び込んできたのが『ウンコに学べ!』(有田正光、石村多門著、ちくま新書、2001年)である。そういうわけで本稿は、「ウンコに学ぶ都市再生政策」というつもりで書いている。

我々は今こそ東洋のうん蓄を傾けて都市再生にあたらなければならない。江戸時代までの優れた都市づくり、風水の思想、循環の思想などが教えるところは今日極めて重い。「都市の風景に関する研究」は先々そこにもつながっていく。『ウンコに学べ!』には次のようにある。

トリハロメタンも出さず、また脱リン・脱窒などの高次処理も行ない、さらには浄水までしてくれるような、そんな高性能な上下水一環処理場はできないものであろうか。それが、実在するのである。水田である。(中略)

水田の土壌は(中略)好気層と嫌気層の二層に分かれている。この土壌の構造が脱リンも脱窒も可能にしてくれるのである。しかも、広大な表面積を持つから空気中の酸素に曝されて好気性のバクテリアによる分解が活発になる。その結果、大量の電力を使用して空気を注入する強制的な曝気の必要もなく、(中略)常に水の流れがあるのでアオコの発生も少ない。

こうして、一昔前までの日本では、尿尿は、川や溜池や湖沼に投入されることもなく、水田に肥料として撒かれ、この高性能の処理場で、一部は下水処理されて川へと還流し、他の一部は浄水処理されて地下水や伏流水となり、飲料水になったのである。この水とウンコの壮大な循環を支えてきたのが水田だった。

戦後やってきた米軍は日本の尿尿処理を臭いと誇ったが、幕末にやってきたペリーは日本の清潔さにただただ驚嘆したのである。そしてその清潔さを支えていたものこそ、ウンコの下肥としての利用に他ならなかったのである。(中略)

生きるということはウンコを食べるということに等しい。いまやペットボトルの水を金を出して買う時代になり、また地下50メートルから汲み出した地下水で作ったことを売り文句にビールが売られたりしているが、われわれがおいしいと言って飲んでいるその地下水も100年の時間をかけて緩速濾過された水である。つまり、100年前の水田から浸み出して浄化されつつ地下浸透した尿尿である。(中略)

再検討すべき重要な問題は、現在の大規

模技術による水循環よりもむしろ、旧来の農業のほうが壮大な水循環を実現していた、という点にある。つまり、江戸時代よりも今日のほうが、ウンコをすぐ口に運んでしまうシステムになってしまっているのである。

さて、「ウンコ」の問題の本質は、今日の都市問題の本質と同じである。今日の都市は「ウンコ」は水に流して隠すようになったが、その他の排出物は隠しきれず、それが地球環境問題にまでなってしまった。それを技術で解決しようなどというのは20世紀的発想である。我々の目の前には技術では如何ともしがたい巨大な問題が立ちはだかっている。その表象がフィリップ・スタルクの「ウンコ」である。あれこそは我々が隠してしまったものの再現(representation)でもあり、また、都市再生の前に立ち塞がるもの(Vorstellung)でもある。

おわりに

「ウンコ」は、都市の人間が自然の大切さを真剣に考えることができる数少ないマテリアルのひとつである。「ウンコ」は心のあり様とも深く結び付いている。かつて日本では「ウンコ」は魔力を持ち、人名にも用いられていた(阿部朝臣男屎、巨勢朝臣屎子、等々)。かの紀貫之も幼名は阿古久曾麻呂であった。鎌倉時代には人名のみならず肥料としても用いられるようになり、江戸時代末期の江戸では長屋の大家のいい収入源ともなって都市経済を支えた。歴史の陰に「ウンコ」あり。都市の再生とは「ウンコ」の再生でもある。